

ピアノについて

音楽班

岩本 麻初 古賀 菜摘 堀 瑠郁

1. はじめに

私たちは、世界の民族楽器を調べていくなかで、現代の私たちにとって、一番身近であるピアノが昔と今とでは構造が大きく違うことを知りました。

昔のピアノから、どのようにして現代のピアノの構造になったのか、とても気になり興味を持ちました。

そこで私たちは、ピアノについて研究することにしました。

2. 調査方法

まず、世界音楽大事典や楽器図鑑などでピアノについて調べました。

現代のピアノと昔のピアノの構造については、よく分かりましたが、

楽器の質感、また音色などについては、事典や図鑑だけではあまり実感が湧かず

実際に楽器をさわったり、音をききたいと思ったので

大阪音楽大学音楽博物館に行くことにしました。

3. ピアノについて

音楽博物館では、ダルシマーやタンジェントピアノなどたくさんの種類の楽器を実際にさわらせていただき、それぞれの楽器の特徴が分かりました。

そのなかでも私たちは、“チェンバロ”と“クラヴィコード”という楽器が、18世紀から19世紀初めのころにできたフォルテピアノというピアノのもとになったのではないかと考えました。

そこでチェンバロとクラヴィコードがフォルテピアノに与えた影響を表にしました。

まず、チェンバロは弦をはじいて音を出します。きれいな音ですが、弦をつめではじいて

音を出す構造では強弱をつけられなかったため、弦をハンマーで打つというフォルテピアノの構造に改善されました。

次にクラヴィコードは、タンジェントという部分が弦を打って音を出しています。演奏する人のタッチがそのまま弦につたわるので繊細で柔軟な音がします。弦をはっているフレームが小さく木製で、鍵盤を強く打ちすぎると、すぐに調弦がくるってしまい1曲演奏するごとに調律しなければいけませんでした。そこでフォルテピアノではフレームを大きくして丈夫な楽器になりました。

フォルテピアノは、すぐに調弦がくるわなくなり、今までと違い、大きな音、小さな音も出せるようになりました。大きな音を出せるようになったことは、とても画期的なことだったのでフォルテピアノの形は現代のピアノに大きくつながりました。

4. まとめ

私たちの身近にあるピアノは長い歴史があり、その時代の演奏者の希望にこたえて、その構造や姿を変化させてきました。今では、住宅環境の変化や技術の発展によって電子ピアノという家庭にも身近におけるピアノもできあがりしました。しかし、それはあくまで電子音です。現代のピアノは完成形といわれていますが、ここからさらにしんかしていくのでしょうか。



現代のピアノ



クラヴィコード

○. 参考文献ならびに参考 web ページ

- ・大阪音楽大学 音楽博物館
- ・世界音楽大事典
- ・楽器図鑑